

2-O-3

### 母性看護学実習における学びに関する研究 —分娩見学を終えた学生の語りを通して考える—

伊東美智子  
島内敦子

〈緒言〉母性看護学実習において学生が分娩見学から受ける恩恵は計り知れないが、少子社会により分娩時の立会い実習を体験できる学生は減少傾向にあるだけでなく、苦しむ産婦を前に戸惑いを隠せない学生が多い。そこで、分娩見学に立ち会えた学生自身からその時の心境等について聴き、今後の学習支援に活かしたいと考えた。〈方法〉分娩期看護を見学や実践した学生の内、研究協力の同意を得られた看護学科 3 回生 7 名に対してグループインタビューを行い、語られた内容を分析してカテゴライズした。〈結果〉産婦に直面した直後の学生は【期待】【嬉しさ】の反面、【不安】【私でよいのか】と迷っていた。分娩が進む中【分娩の大変さ】を実感し、産婦に対して行っている援助に対し【正解が分からない】【これでいいのか】と、常に【自己の振り返り】をしていた。見学中は【実践したケア】もある一方、【分娩中に困ったこと】をあげた声もあった。〈考察・結論〉多くの学生が「自分に何ができるのか」と、自己効力感が低下したまま産婦の傍に付き添っていた。しかしそのままでは、学生自身の学習効果が期待できないだけでなく、肝心の産婦への看護にも集中できない。この状況を脱する手段として安酸は、言語的説得の有用性を示している。さらに学生は、苦しむ産婦を前にして「これでいいのか」「正解がわからない」と、自問自答や葛藤を内包した、自己内対話を繰り返していたことも分かった。

2-O-4

### 都市部から移住した看護師が離島医療機関に定着するまでのプロセス

伊東美智子  
黒野利佐子 長尾厚子

【目的】我が国のへき地医療は、地元へき地拠点病院を中心とした巡回診療や医療者派遣等によって守られている。人材不足から、都市部より医療者を受け容れることが不可欠だが、地元で溶け込んで活躍できるまでの道程は容易ではない。そこで本研究では、へき地に赴任した看護師が現地に定着するまでの過程を明らかにし、支援への示唆を得る。【研究方法】1. ライフライン・インタビュー・メソッドにより、赴任当時から現在までの心情の変化を描いた。2. 線描図も活かしつつ聴き取りを実施した。3. 面接は二回行い、複線径路等至性アプローチによる作図に対して協力者からコメントを得、分析を重ねた。【結果】協力者は西日本の離島医療機関に勤める看護師 12 人。『赴任当初の戸惑い』は、「仕事」関連だけでなく「気候風土や文化が一変し適応に苦慮」し『行き詰まって独りで悩む』時期があった。しかし多くは「職場や地元の人に悩みを打ち明ける」ことを契機に心情が上向いた。そこから「患者への看護」や「地元の伝統芸能や歴史的文化的文化財に触れる」ことを積極的に行い、次第に『地域に溶け込め』て「自分の居場所」を見つけ、やがて『離島の看護師として定着』していった。また、「方言」をも『患者とのコミュニケーション』の糸口にしていた。【考察】都市部からへき地で従業するには、単なる転職ではなく異なる生活環境や文化への適応も必要で、カルチャー・ショック理論が援用できると考える。